

## <論 説>

# 1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態(4) ——ドイツ人と社会主義運動(完)——

的 場 昭 弘

### 目 次

はじめに

(1) フランスにおけるドイツ人結社の分布

(2) パリにおけるドイツ人結社の分布

(3) 初期社会主義運動の組織的実態

a. 「追放者同盟」「義人同盟」「共産主義者同盟」の組織的実態

b. マルクス、エンゲルスと初期社会主義運動との関わり

小括

### は じ め に

既発表論文「東フランス」[B, 12] から「パリについて」[B, 13] そして「西南フランスについて」[B, 14] [B, 15] [B, 16] にかけて、1840年代のフランスにおけるドイツ人の実態を克明に検討してきたが、本稿ではそうした実態が、フランスにおけるドイツ人の社会主義、共産主義運動とどのように関係しているかを分析することにする。フォアメルツにおいてドイツ人の社会主義、共産主義運動に果たしたフランスの役割については、これまで多く語られてきた。1830年代から始まる追放者同盟、義人同盟、共産主義者同盟にいたる流れは、労働運動史研究において、またマルクス主義成立史において重要な役割をなしているが、これら三つの同盟はすべてフランスと関係している。フランスとドイツの社会主義・共産主義運動を検討すること自体、なんら新しいテーマでもない。ただ、本稿で取り扱うのは、こうした同盟の思想的内容でも、その具体的組織形態でもなく、フランスのドイツ人全体、またパリのドイツ人全体の中から見たその相対的位置づけである。ここでの第一のポイントは、1830年代から

1848年革命の頃まで、フランスでどれだけこうした結社が存在し、またそれがどのように相互に関連していたかという地理的分析と、その変遷を見るクロノロジカルな分析である。第二のポイントは、そうした秘密組織は、それ以外の表でのドイツ人組織とどのように関係していたかということである。こうした分析は、当然当時のドイツ人社会の全体図が描かれねば意味をなさないことであり、これまでの一連の論文で分析された事実がその前提になる。

### (1) フランスにおけるドイツ人結社の分布

#### フランスにおけるドイツ人 結社の状況

##### 表での組織

教会（福音教会）協会  
（読書協会、合唱協会、  
援助協会、教育協会）、  
職業別団体（靴職人、  
家具職人、仕立て職  
人）、新聞雑誌

##### 社交の場

居酒屋、貸本屋、読書  
クラブ、カフェ、病院

##### 裏の組織

秘密結社、職人組織

1830年代から40年代にかけてフランスにいたドイツ人は数十万人である。ドイツ人は、それぞれの地域で独自の組織を作っていく。そうした組織は、すべて秘密結社というわけではない。図に示されているように、一般の眼にも触れる組織としての表での組織である教会、協会、職業別団体、新聞・雑誌などがまず存在していた。その下に結社とは言いがたいが、組織を作る前提になる社交（sociabilité）の場が存在していた。それは居酒屋、カフェ、貸本屋などである。その下に表面には現れない組織として裏の秘密結社が存在することになる、こうした構造こそ当時のフランスにおけるドイツ人結社の特徴であった。

この中でもっとも表てに現れる組織としては、フランスに住むドイツ人の心の糧となる教会である。まず、ドイツ人たちはそれぞれの宗派にあわせて教会へ行くが、フランスのようにカトリックの強い地域では、カトリック以外の宗派の方が独自の運動を展開していく。福音派

の影響の強いストラスブールは別としてパリ、ボルドー、エペルネー、ル・アーヴル、フランス、リヨンにそうした都市に福音グループ、福音協会が形成される。ボルドーは、古くから北ドイツとの交易があったためであり、エペルネー、フランスはシャンパンの経営者や労働者がドイツから来ていたためであり、ル・アーヴルはドイツ人移民が多くここから船出していたからであった。リヨンは、ドイツ人職人の通過コースであったからである。この福音協会は、公的な組織で教会の設立運動や相互扶助などを行っていた。

次に教会に関連して結成される組織として合唱協会がある。これはパリ以外ではほとんど記録に残っていない。読書協会は、ストラスブールとマルセーユにその記録が残っているが、他の地域にもあった可能性はある。援助協会に関しては、パリ以外にはそうした本格的な組織は存在しないようである。それはおそらく福音協会がそれを兼ねているからであろう。パリ以外ではリヨンにあったドイツ人職人の道徳的改善と支援の協会がその類であると思われる。教育協会に関しては、半ば公の眼に触れる団体である労働者協会がその役割を担っていた可能性がある。ストラスブール、シャンベリーなどにそうした存在が記録されているが、ブリュッセルの労働者協会や、ロンドンの労働者教育協会との関係は不明である。

フランスに住む多くのドイツ人遍歴職人達の集団は、フランスでそれぞれの職業集団をつくっていた。パリではとりわけドイツ人仕立て職人、靴職人、家具職人の集団が力をもっていたが、こうした集団は、そのまま一部は秘密結社になるわけであるが、それ以前に一般にそうとみなされうるような集団を形成していた。地方でこうした職業集団を形成できる場所は、ストラスブールか、リヨン、マルセーユぐらいしかないであろう<sup>(1)</sup>。こうした職業集団をもつ地域が、秘密結社の存在する地域と重なるのも当然である。

一般の眼に触れる組織として特異なのは、新聞雑誌である。ドイツ語の新聞については読書協会に行けば読むことができるわけであるが、フランスにおける細かい情報は、フランスに住むドイツ人自身の新聞から得るしかない。こうしたメディアが発展する場所は、表(1)を見ればわかるように、パリを除けば

表(1) 1830-40年代フランスにおけるドイツ人の新聞、雑誌 ([B, 4] より作成)

都 市 名	新 聞, 雑 誌 名	発行年
ストラスブール	『コンスチトゥーショナル・ドイッチュラント』	1830-32年
	『エルヴィナ』	1838-39年
編集者のみストラスブール	『ブラーガ』	1838-39年
ミュルーズ	『フォルクス・トリビューン』	1847年
パリ		
リシュリュール通り65番	『追放者』	1834-36年
プロヴァンス通り67番	『ルヴュー・デュ・ノール』	1835-38年
プール・サン・ジェルマン通り41番		
ラフィット通り44番	『バランス』	1836年
モンマルトル通り39番	『ル・モンド』	1836-37年
リシャール通り24番	『ドイツのパノラマ』	1838-39年
モンマルトル通り39番	『パリ新聞』	1838-39年
リシュリュール通り64番	『ディ・ツァイト』	1839年
キャプシーヌ大通り44番	『フォーラム』	1839年
	『人民の声』	1839年
ショセ・ダンタン通り22番	『デア・シュテルン』	1843年
ヌーヴ・サン・トーグスタン通り36		
ムーラン通り32番	『フォアヴェルツ』	1844年
ヴァノー通り22番	『独仏年誌』	1844年
サン・タントワヌ通り51番	『ドイツ・シュトイアーマン』	1844-46年
ラシーヌ通り28番(印刷所)	『ブレッター・デア・ツークンフト』	1845-46年
サン・ルイ通り46番(印刷所)	『ドイッチェス・パリザー・ジュルナル』	1846年
	『ドイッチェ・トリビューン』	1847年
アルブ通り90番(印刷所)	『パリザー・ホーレン』	1847年
シャトー・ブリアン・アヴェニュー4	『パリタ刊新聞』	1848年

ストラスブール、ミュルーズしかない。しかし、そうした新聞も1830年代どまりであり、1840年代からはすべてパリに集中する。

表てと裏の組織の間にドイツ人が集合する社交の場があったが、それは居酒屋、貸本屋、読書クラブ、カフェ、病院である。その中でも居酒屋やカフェの果たした役割は大きい。ストラスブールには1830年代多くのドイツ人亡命者、職人が住んでいたが、そこにはレプヒューネル (Rebhünel) という居酒屋があり、追放者同盟のフェネダイなどがよく利用していた ([B, 13] の注 (25) 参照)。カフェはマルセーユのユグリー (Hugly)、ナントのカルミハエル (Carmichael),

表(2) フランスにおけるドイツ人結社一覧表 ([A, 1] [A, 2] により作成)<sup>(3)</sup>

都 市 名	黙 認 の 結 社	秘 密 結 社
ストラスブール	読書協会	人権協会 1842年
	下ライン愛国人民協会 1848年	青年ドイツ 1834-1839年
	ドイツ人軍団 1848年	復讐協会 1834年
	民主協会	青年ドイツ・クラブ 1845年
ナント		労働者協会 1845年
マルセーユ	読書サークル	ドイツ共和主義者中央委員会 1849年
		ドイツ共産主義者協会 1845年
リヨン	ドイツ人職人の道徳的改善と 支援の協会 1845年	ドイツ共産主義者協会 1845年
		青年ドイツ 1845年
		青年ドイツ・クラブ 1845年
ディジョン	福音協会	ドイツ共産主義者協会 1844年
		青年ドイツ 1848年
シャンペリー		ドイツ共産主義者協会 1845年
シャロン・シュル・マルヌ	ドイツ人軍団 1848年	ドイツ労働者協会 1847年
ボルドー	福音協会	ドイツ共和主義委員会 1848年
ル・アーヴル	福音協会	
ランス	福音協会	
エベルネー	福音協会	
ブザンソン	ドイツ人軍団 1848年	
ミュルーズ		青年ドイツ 1836年

ディジョンのペターソン (Peterson), リヨンのフリッツ (Fritz), ミューラー (Müller), ベール (Beel) などは、そのまま秘密結社と関係していた ([B, 13] の注(26) 参照)。しかし、あくまでも居酒屋とカフェは表面上は偶然の出会いを保証する場にすぎなかった。貸本屋や読書クラブについては、パリ以外ではマルセーユしか記録は残っていないが、ドイツ人専門ではなく、フランス人も利用するクラブでドイツ人が相互に情報を提供したことはあり得る。病院に関しては、ロンドンのドイツ人病院のような本格的なものはフランスには存在しなかったが、パリでは追放者の同盟の中心人物シュースターなどが積極的にドイツ人を診療していたが、地方においてどのような状態であったかは不明であ

る。

秘密結社というのは、こうした表面上に現れる集団に隠れた組織である。しかし、表面上の集団とまったく分離しているのではなく、ある面では密接に関連していた。フランスにおいても政治的に急進的な結社は公にすることはできなかったが、ドイツ人たちはそうした中できわめて多くの秘密結社を作っていた。その中で有名なのがパリの追放者同盟である。地方でも多くの秘密結社が存在した。ストラスブールでも人権協会、青年ドイツ、復讐協会、青年ドイツ・クラブ、労働者協会などが存在した。これらの組織はもちろんパリの追放者同盟や義人同盟と直接関係するわけではない。ナントのカルミハエルの共産主義者協会、マルセーユのユグリーの共産主義者協会、リヨンの共産主義者協会は家具職人が中心であり、密接に関連している。この結社はベッカーとスイスのレマン同盟との関係をもっており、ヴァイトリンクの義人同盟と関係していた可能性はある。ただ、マルセーユ、ストラスブール、リヨンには青年ドイツ・クラブもあり、義人同盟はフランス内でも青年ドイツ派となかば共存していたことを物語っている。この二つのグループの存在は、スイス、ドイツにおけるシンジケートを比較してみるとよくわかる。

フランスのドイツ人秘密結社は、さまざまな地域と密接な関係を保っていた。もっとも大きなシンジケートを持っていたのは、おそらく青年ドイツであったと思われる。スイス各地の青年ドイツ派のシンジケートは1830年代に形成されていくが、何度かの追放にもかかわらず依然として力を持っていた。1845年における青年ドイツの組織はジュネーヴ、ローザンヌ、ヴェヴェー、シヨー・ド・フォン、ベルンなどスイスのかなりの地域に広がっていた。フランスでは、パリ、リヨン、マルセーユ、ストラスブールに大きな組織があったが、フランスとスイスを結ぶいくつかの線は青年ドイツの主要動脈であったと言えよう。これに対して、共産主義者組織も、ほぼ同じ地域ローザンヌ、ヴェヴェー、ジュネーヴ、ヌシャテル、シヨー・ド・フォンに組織をもっていた。またフランスにおいてもパリを除いても、ストラスブール、ディジョン、ナント、マルセーユ、リヨンであり、これはほぼ青年ドイツ派と同じである。青年

ドイツ派は知識人が中心の組織であり、その目的はドイツの統一であり、共産主義者と基本的には相いれないわけであるが、組織的にも、人的にもけっして明確に分離できる組織であったと言うべきではないかもしれない。

## (2) パリにおけるドイツ人結社の分布

1840年代においてドイツ人結社がもっとも多かったのはパリである。パリは1840年代海外における最大のドイツ人居住区であったわけであり、その意味では当然のことであったであろう。特にパリのドイツ人は、職人層や亡命者だけでなく、外交官や大商人、旅行者、芸術家、学者などその顔ぶれは多彩で、非常に複雑なコロニーを形成していた（[B, 13] 参照）。もちろんこうしたコロニーにおける結社も、フランスの諸都市のドイツ人結社のありかた同様、先の図のように表て組織、社交の場、裏の組織という形で形成されていた。

表ての組織の中でもっとも代表的なものは、宗教上の組織である。カトリックは、パリの北のヴィレットに1837年に協会をつくり、福音派も1846年にドイツ人の家具職人のコロニーのあるサン・タントワヌに福音協会を設立した。こうした組織は教会の設立と貧民の救済、子弟の教育を目的としていた。そうした流れの中に合唱協会も位置づけられる。ドイツ人の情報交換の場としてできた1831年の合唱協会は、コロニーにおける最初の組織であるが、政治性を含みつつ、それを越えた部分で組織されたものであった。後の秘密結社はそこから発展していくことになる。ドイツ人人民協会、愛国協会などはドイツにおける出版の自由と祖国統一を求める公の組織で、そこに参加したヴォルフム、ガルニエたちは、後の秘密結社の主要メンバーになる。次第に弾圧を強めてくるルイ・フィリップ政権下で、1834年頃まで比較的自由に行動していた。こうした組織は思想的にも次第に急進化し、秘密結社として地下にもぐることになるが、公の部分でこうした組織を支えることになるのが、援助協会、職人協会、医師協会などである。援助協会はボルンシュテットが始めた組織が有名であるが、ボルンシュテット自身パリ、ブリュッセルいずれの都市でも労働者の秘密結社とも深く関係することになる。援助協会の資金はパリに住む豊かな

人々の寄付によるものであり、パリに居住するドイツ人一般を対象としていたが、ここの職種別の援助を対象とする特殊な組織としては、靴職人、仕立て職人などを対象とした職人協会があった。この中心には、追放者同盟の中心にたつムシャーニがいた。また、ドイツ人の医療診断をしていた組織に医師協会があったが、その中心人物シュースターもやはり追放者同盟の中心人物であった。パリにおける秘密結社は、こうした表での組織と深く関係していたため、秘密結社の政治闘争は表での職種別、組織別の相違を反映していた。

パリのドイツ人たちは多くの居酒屋やカフェで情報を交換しあっていたが、有名な店はクレーガー (Kroeger)、クーン (Kuhn)、シーファー (Schiever)、シェルツァー (Scherzer)、カフェ・ガイサー (Gaisser) などで、ほぼセーヌ右岸の家具職人を中心とするサン・タントワヌから、靴職人、仕立て職人を中心とするサン・トノレ界限までに集中していた。こうした場所は、表での組織としての中心であり、また裏の組織、追放者同盟や青年ドイツの中心でもあった。この界限にはまたドイツ人専用の読書クラブもあつた<sup>(4)</sup>。

そうした社交の場は、新聞雑誌の発行の場とも重なり合っていた。パリで発行されるドイツ人向け新聞、雑誌はかなりの数にのぼったが、その多くはやはりセーヌ右岸のこの一帯に集中していた。住所で見ると、秘密結社の機関誌『追放者』とモイラーの『ディ・ツァイト』は同じリシュリュー通り64番であるし、『独仏年誌』を先取りした『ル・モンド』とボルンシュテットの『パリ新聞』は、同じモンマルトル通り39番である。『パリ新聞』の後継が『ディ・ツァイト』であることを考えれば、四つの新聞は非常に狭い範囲で作られていることになる。しかし、一方できわめて急進的であったり、他方できわめて穏和であったりしているのである。しかも、編集者同士は、思想的に似通ったりもしているのである。パリで発行された新聞はどれも一年ぐらいの短命な新聞であるが、それぞれ微妙に関連しあっていた。秘密結社内での思想闘争は闘争として、新聞という媒体ではお互いのシンジケートをもっていたというべきである<sup>(5)</sup>。

セーヌ右岸にドイツ人の表での結社と新聞は集中していた。これは秘密結社



についても言える。秘密結社の住所を見つけることは、本来不可能であるが、表ての組織、職人協会、新聞や集会場所から検討することができる。ここで注目すべきは、秘密結社は後年マルクスやエンゲルスがまとめたように、追放者同盟、義人同盟という二つの組織から成り立っていたというわけではない。追放者同盟から義人同盟へと発展し、共産主義者同盟へいたるという秘密結社の図式は、多分に共産主義者同盟の覇権を掌握したマルクスとエンゲルスが自己を正統派として位置づけるために作り上げた歴史の捏造的解釈であったと思われるが、本来は追放者同盟ひとつをとっても、実は崩壊しておらず1840年代まで一貫して存在していた<sup>(6)</sup>し、追放者同盟以外にも、同時期にリヨンやマルセーユ、そしてスイスと深い関係を持っている青年ドイツや、多くの追放者同盟員をかかえるドイツ人同盟、ドイツ・ヴェンダ協会、行動協会、共産主義的職人組合、コミテー、ドイツ共産主義協会などが存在していた。こうした組織の人物はなかば交錯し、半ば相違している。その理由は秘密結社自体が複雑に交錯していたことを意味する。けっして追放者同盟だけが大きく、重要な組織であったとは言えないであろう。思想的にも、共和主義を信奉する人々から共産主義者まで、平和闘争を語る人々から武装蜂起を主張する人々までさまざまであり、こうした集団が一つにまとまっていたと考えること自体むしろおかしいと考えるべきであろう。追放者同盟から義人同盟へ移行する流れの中で出てくる共産主義と共和主義との抗争も、分派活動であまり意味をもっていないとも考えられよう。義人同盟の中で、武装派のヴァイトリンクと平和路線のシャパーとの分離も、シャパーも参加していたドイツ人同盟を見る限り武装闘争派でもあり、明確に線を引くことは難しい。またこの組織自体、追放者同盟、義人同盟と対立もして、一体組織自体分派活動をどう規制していたかがわからなくなってくるのである。

追放者同盟→義人同盟→共産主義者同盟という流れが、いかに単純化した流れであるかは、1848年革命ではっきりする。それは、組織的な唯一の正統派であるとされる共産主義者同盟が、パリに本部を移して結成したドイツ人労働者クラブはドイツ人の組織としてはきわめて脆弱の組織であったからである。そ

表(3) パリにおける結社 ([A, 1] [A, 2] により作成)

黙認の結社	秘密結社	中心人物, 本部, 集合場所
合唱協会 1831年		
職人協会 1841年		仏人, 独人, ベルギー人 靴職人, 仕立て職人
ドイツ人職人協会1830年代はじめ		
パリ・ドイツ人医師協会		シュースター
ドイツ人民協会(ドイツ人読書, 人民協会) 1840年		カフェハウス, パサージ・ソーモン
ドイツ人職人協会 1834年		ジーベンファイファー グラヴィリエ通り
ドイツ人民協会, ドイツ人愛国者協会 1830-34年		ムシャーニ
援助協会 1844年		ガルニエ, ヴォルフム
福音協会 1846年		ボルンシュテット
カトリック 1837年から		サン・タントワヌ通り
ドイツ中央ビューロー		ヴィレット通り
ソシエテ・エデ・トワ・エール・シエル・テード(援助協会)		サン・タントワヌ通り
ドイツ共和主義協会 1835年		ヴァルト
仕立て職人協会 1840年		コポー通り, モンパンジエ通り, サン・ジェルマン・ロセロワ通り
	追放者同盟 1834-1847年 (義人同盟)	シュミット, コキリエール通り フェネダイ, シュースター, ヴァイトリンク モイラー, エヴァーベック
	ドイツ人同盟 1836-1842年	シュースター, シューラー, ゴールドシュミット, 皮革工, シャパー, モールなど
	ドイツ人労働者結合 1847年	ハルゼンヴィンケル
	ドイツ人アソシアシオン 1844-5年	ボルンシュテット
	贖罪連合 1833年	ヨゼフ・ガルニエ
	青年ドイツ・クラブ 1939年	ベターソン, コンブスト, シューラー シェーファーのビアハウス, ティルシャップ通り, ルソー通りなど
	ドイツ・ヴェンダ協会 1846年	ムシャーニ
	ベルグクナッパー協会 1833年	ブライデンシュタイン兄弟
	ドイツ人愛国協会 1832年	ヴォルフム
	行動協会 1838-45年	ルスト, ベッカー, ヴァイトリンク
	共産主義的職人組合 1845年	エヴァーベック, 仕立て職人, 美術家具師 ヴァンセンヌ市門近くのキャバレーフローム
	オート・ヴェールト(貴高き緑)	共和主義者
	クナップスシャフター(鉱山労働)	エッケルベルク

	者)	1832-35年		
	コミテー	1845年	ヴァイトリンク派	
	ドイツ共産主義協会	1845年	エヴァーヴェック 仕立て屋, ムシュー・プランス通り 居酒屋シュルツァーやカフェ・ガイサー ガストハウス・シーファー, ホテル・コメット	
	ドイツ共産主義者協会	1840年	ベッカー	
	未成年労働者	1833年	シュースター	
	ドイツ出版協会	1833年	ヨゼフ・ガルニエ	
	ドイツ人愛国協会	1833年	シューマヒャー, 仕立て屋	
	人権協会	1834年	ヴォルフ	
	政治協会	1837年	エル・ボンサ	
	ドイツ愛国人民協会(人権協会)		シューマヒャー, ムシャーン, クム	
		1833年		
ドイツ民主協会	1848年	エヴァーベック委員会	1848年	サン・トノレ, カフェ・デンマーク モンマルトル通り64番, サン・タンヌ通り イタリア通りカフェ・ミュルーズ ヘルヴェーク, ボルンシュテット
ドイツ人軍団	1848年			パリ, ストラスブール, シャロン, プザンソン
		パリ・ドイツ人委員会	1849年	エヴァーベック, プリント, ザイラー
		ドイツ人労働者クラブ		マルクス, シャパー, サンドニ通りカフェ・ピカール グルネル・サントノレ通り
		革命的ドイツ人委員会	1849年	ヘス
		スラブ・ドイツ人友愛会	1849年	
		仏独協会	1848年	多くは仕立て屋
		復讐協会	1849年	シュナイダー

れに対しヘルヴェーク, ボルンシュテットを中心とする武装闘争派は, 5,000人ものドイツ人を組織することになるのである。セーヌ右岸のサン・トノレ界隈で行われた組織活動に, 共産主義者同盟はほとんど力を持つことができなかった。それは, パリにおいて追放者同盟, 義人同盟, 共産主義者同盟以外の組織が有力であったという事実, 職人相互の表ての組織に影響された組織活動がしっかりしていたという事実によって説明可能である。もちろん, この時ですら, パリのドイツ人秘密結社は二つにまとまっていたわけでもなく, ささまざまな党派が併存していた。パリには1848年革命以後いくつかの結社ができるが, それらの中でわかっているものは, パリ・ドイツ人委員会, ドイツ人軍団,

ドイツ人労働者クラブ，エヴァーベック委員会，革命的ドイツ人委員会，スラヴ・ドイツ人友愛会，仏独協会，復讐協会である。1850年代には各地で，ドイツ人の結社が最後の動きを示し，それがケルン共産党裁判と関連する [B, 16]。

パリの組織はそれぞれ外国の組織と密接に結ばれていた。こうしたシンジケートは第一にドイツ人職人の遍歴コースにしたがってできていった。まず，パリ—リヨン—マルセイユ—スイス—ミュルーズ—ストラスブールという東フランス，スイス，南フランスを結ぶ三角形のコースである。このコースは1830年代初期の青年ドイツの広がりを示すコースでもある。1830年代の弾圧を逃れた人々はスイスに向かったが，そこで「西南フランについて（上）フランス経由でスイスを追放されたドイツ人のルート」[B, 14]で述べたように青年ドイツが形成される。青年ドイツはスイスにおいてその力を蓄え，やがてフランスへ進む。こうした動きに対して，追放者同盟，義人同盟は，青年ドイツと同じくスイス，フランスにおける職人遍歴コースを軸として発展する。したがって，青年ドイツのシンジケートとほぼ併存しているわけである。しかし，青年ドイツを凌ぐのは，海を渡ってイギリスへその力を伸ばしたことである。青年ドイツもイギリスへ追放されたことは述べたが [B, 14]，彼らの多くは再びスイス，フランスに戻っており，イギリスにその力を伸ばすことはあまりなかった。ただしイギリスの場合，もっぱらロンドンに集中している。しかも，彼らがベルギー，アメリカ，さらにはドイツ本国へと力を伸ばしていることは注目に値する。こうした動きはマルクス，エンゲルスの共産主義通信委員会による国際的連帯組織以前のものであった。パリからロンドン，ロンドンからブリュッセル，ブリュッセルからパリといった三角形のコースは，1845年以降のこの結社の枢軸となる。さらにブリュッセルからはヴェルヴィエ，ケルン，エルバーフェルトへのコースが展開し，やがてマルクス，エンゲルスの派閥の枢軸となる。またパリ，ストラスブール，マインツ，フランクフルト，ベルリンのコースも発展するが，これは，1848年のヘルヴェークのドイツ人軍団のコースでもあった。そのほかの組織も，パリ以外に支部を作ろうとしていた。ドイツ人同盟はフランクフルト，ミュンヘン，ウィーンまでのコースをとろうとしていたし，

表(4) 結社のフランス以外の支部 ([A, 1] [A, 2] の史料から作成)

結社名	都 市 名
ドイツ人同盟 追放者同盟, 義人同盟	ベルリン, ウィーン, ミュンヘン, フランクフルト, マインツ フランクフルト, マインツ, ダルムシュタット, シュライン, クロイツナッハ, ハノーファー, ハンブルク, プレーメン, ローザンヌ, モルジュ, ロール, ヴェヴェー, オルブ, ラサラ, イ ヴェルドン, ジュネーヴ, ヌシャテル, ラ・ショー・ド・フォン, バーデン(スイス), リース タール, ル・ロクル, バーゼル, ブリュッセル, ロンドン, キール, ベルリン, ケルン, ヴェル ヴィエ, ニューヨーク, エルバーフェルト, プレスラウ, マグデブルク, ライプツヒ, リエ ージュ, ストックホルム, アムステルダム, フィラデルフィア
スラヴ・ドイツ人友愛会	ドレスデン, プレスラウ
貴高き緑	ロンドン, ブリュッセル, フランクフルト, ケルン, アーヘン
ドイツ共産主義者協会	ロンドン, ブリュッセル, ハンブルク, マグデブルク, ラ・ショー・ド・フォン
青年ドイツ	ジュネーヴ, カルージュ, ニヨン, ロール, オーバンヌ, ローザンヌ, エーグル, ヴェヴェー, イヴェルドン, ムードン, パエンヌ, ラ・ショー・ド・フォン, フルリエ, ビエンヌ, サンチミ エ, ベルトウー
民主協会	ハイデルベルク, ノイシュタット, ラーン

スラヴ・ドイツ人同盟はドレスデン、プレスラウといったポーランド方向を目指していた。また一方「貴高き緑」、ドイツ共産主義協会は、マルクス、エンゲルス派と同じロンドン、ブリュッセル、ケルン、アーヘンへの拡大を狙っている。民主協会は、ヘルヴェークのドイツ人軍団のことであるが、ヘッカーの南ドイツでの蜂起に参加するという目的もあって主として、バーデン地域を中心に支部を拡大していく。

このように見ると、ドイツ人同士の国際的な連帯運動は、追放者同盟や義人同盟以外にも多くの結社がやっていたことであり、必ずしもマルクス、エンゲルスの共産主義通信委員会の貢献ではない。しかし、それぞれの国の労働者とのつながりを求めようとした点で、国際的連帯を考えるならば、義人同盟に優先権があるであろう。しかし、実際にはそうした連帯は、せいぜいロンドンのチャーチストと連絡が取れたという程度の域を出ていないか、あるいは民主主義組織、民族主義者組織と連携をはかり、ベルギー人、ポーランド人などへ広がったにすぎない。この点に関しては、ハーニーと関係をもち、民主協会との連絡をとったマルクスとエンゲルスの貢献とっていいかもしれない。しか

表(5) 1830年代、40年代のスイス、イギリス、ベルギーにおけるドイツ人の新聞雑誌 ([B, 4] により作成)

都 市 名	新 聞, 雑 誌 名	発 行 年
スイス		
チューリッヒ	『北の光』	1834-1835年
ビエンヌ	『青年ドイツ』	1836年
ベルヴュ, コンスタンツ	『灯台』	1838-39年
ベルヴュ	『ドイツ・フォルクスハレ』	1839-41年
ジュネーヴ, ベルン	『ドイツ青年の叫び』	1841年
ローザンヌ	『民衆的職人』	1842年
ベルン, チューリッヒ	『青年ドイツ』	1842-43年
チューリッヒ, ヴィンターツ アー	『スイスからのドイツ人の使い』	1842年
ヴェヴェー, ローザンヌ	『現代』	1844-45年
ローザンヌ	『喜びの知らせ』	1845年
ローザンヌ	『災い』	1845年
ベルヴュ	『ライン年誌』	1846年
ヘリザウ	『プロメテウス』	1846年
チューリッヒ	『ドイツ・トリビューン』	1846年
バーゼル	『ドイツの傍観者』	1848年
ロンドン		
サザンプトン通り	『ドイツ人の生活・芸術・詩』	1834年
	(手書き)『ドイツ人新聞』	1837年
	『ドイツ人・ポーランド人新聞』	184?
グレート・クィーン通り	『ロンドン・ドイツ人新聞』	1845-51年
ウォーレン通り		
セント・マリー・アックス通り		
セント・マリー・アックス通り	『共産主義者雑誌』	1847年
ブリュッセル		
	『グレンツボーテン』	1841-42年
ロクシム通り	『ドイツ人新聞』	1844-47年
ポタニック通り	『ブリュッセル・ドイツ人新聞』	1847-48年

し、これも実際には、非常に限られており、「万国の労働者よ、団結せよ」という『共産党宣言』の言葉は、現実的なものではなかった。

パリの結社のフランス以外での活動は当然、フランス以外での機関誌の発行という形をとってくる。特に1830年代はフランス以外ではスイスでの出版活動が多い。ロンドンでも若干の新聞、雑誌が出ているが、たいして重要なもの

はない。1840年代になってもスイスでの出版は減少していない。とくに『北の光』、『ドイツ青年の叫び』など重要なものがスイスから出版されていることには意味がある。スイスは、パリにつぐドイツ人の新聞、雑誌の発行所であったばかりでなく、秘密結社の重要な本部があった場所でもあった。こうした新聞、雑誌はスイスの国境を通り、リヨン、マルセーユ、パリにもたらされることが多く、またパリの新聞、雑誌もスイスにもたらされていた。ただその流れはほぼ1845—46年を最後に終わり、その流れは次第にロンドン、ブリュッセルに移動する。ただ、全体としては1848年革命までのスイスやパリと比べると少ないと言わざるを得ない。基本的には、1848年革命までの中心地はパリとスイスにあったと言うべきであろう。このことは、ロンドンのシャパーの義人同盟、ブリュッセルのマルクス、エンゲルスの力が主流とはなっていないことも意味している。義人同盟の中心は、依然としてパリにあったのである。その最大の理由はドイツ人人口が依然としてパリにとりわけ集中していたことにある。

### (3) 初期社会主義運動の組織的実態

#### a. 「追放者同盟」「義人同盟」「共産主義者同盟」の組織的実態

従来の初期労働運動史研究では、西側のいくつかの研究、たとえばシーダーの著作 [B, 8] を除きパリにおけるドイツ人の共産主義運動は普通次のように説明されてきた。

1834年パリで初めて共産主義者思想の萌芽をもったドイツ人組織、追放者同盟が誕生し、やがてその中で、共産主義的思想をもつ人々と、そうでない人々が対立し、前者が義人同盟として追放者同盟を発展的に解体した。義人同盟は、それまで武装蜂起派が主流であったが、ブランキの季節社の蜂起に参加したシャパーを初めとして多くが逮捕され、その結果武装蜂起派は力を失い、ロンドンに亡命したシャパーを中心としてロンドンで平和革命路線を中心とする労働者教育協会、すなわち義人同盟ロンドン本部ができた。一方でパリでの武装蜂起を支持するヴァイトリンクを中心とする一派は、シャパー派と敵対し、パリおよびスイスで武装闘争を行うが、結局失敗し、次第に義人同盟内で力を失

う。また、義人同盟内にはグリュンを中心とした教育的啓蒙を中心として社会変革を行おうという真正社会主義者もいた。平和闘争という点では同じであったが、資本主義発展によるブルジョア革命、そしてプロレタリア革命という二段階革命論を理解できなかった点で、理論闘争に敗れ、義人同盟はシャパーを中心とする正統派に統一される。その理論的中心にいたのが、マルクスとエンゲルスであり、マルクスとエンゲルスは、追放者同盟→義人同盟→共産主義者同盟といたる正統派の正しさを証明することになる。

こうした説明の基礎となっているのはエンゲルスの『ケルン共産党裁判の真相』の新版へのまえがき(1885年)[B, 2, SS. 577-585]とマルクスの『フォークト氏』(1860年)[B, 6, SS. 438-440]であり、その後マーリンクがそれを敷衍した。特に旧ソ連、東独の研究は、マルクスとエンゲルスの初期労働運動史における正統性を証明するために、そうした説明をさらに補強するという態度をとってきた<sup>(7)</sup>。しかし、この説明にはいくつか問題点がある。マルクスの『フォークト氏』は、マルクスが陰謀との関係を否定するために書いたという点で、とりわけ平和革命路線で書かれている。そうした戦略抜きで読むことはできない。エンゲルスの論文も、ケルン共産党裁判で起こった陰謀との関係を否定しようという意図で書かれたものであり、ドイツ社会民主党へつながる平和路線からいって、共産主義者同盟の平和路線をことさら強調している。ソ連、東欧の研究ではこのあたりが微妙に揺れ動いている。平和路線を政治的に強調することによってマルクスとエンゲルスの二段階革命論と権力掌握を説明することは、暴力革命としてのロシア革命を場合によっては否定することとなるからである。そこでマルクスとエンゲルスの武装革命論もけっして捨てていないわけではない。しかし、1848年革命を第一段階革命、ロシア革命を第二段階革命と主張することでいけば、1848年革命の平和革命路線は正しいことになり、マルクスとエンゲルスの平和革命路線は生きることになる。そのあたりが微妙に揺れているのである。多くの研究は後者であるが、なぜか『マルクス伝』の類いに関してはマルクスの武装闘争的部分を残しているのである<sup>(8)</sup>。

さてこの一般的な説に疑問を提示してみよう。すでに見たように、当時の追



放者同盟の発展、解消はそれほどはっきりしたものではなかったということ、たとえ義人同盟に解消したとしても、追放者同盟はずっと残存していた可能性があるわけであった。つまり共産主義とは関係のない人々たとえばシュースターやフェネダイは、その後ずっと追放者同盟に関連していた可能性もあるということである。これは追放者同盟が共産主義思想以外にも展開する可能性をもっていたことを意味する。パリに存在する多くの組織は、さまざまな人々が錯綜しあっており、たんに共産主義かそうでないかによって分離できるものではなかったということである。また、追放者同盟以外にも共産主義者を標榜する組織はあったし、またそうした組織のメンバーが一方で追放者同盟と重なっていたことは、追放者同盟の発展解消だけでは当時の共産主義運動を説明したことにはならないことを意味している。

次に義人同盟と季節社の蜂起<sup>(9)</sup>との関係である。義人同盟内の平和革命路線を捻出するために季節社の蜂起と義人同盟とのつながりは重要な問題となっている。また、これはドイツの共産主義運動が、フランスの社会主義運動と密接に結びついていたことを示す論拠にもなっている。しかし、季節社との関連については、フランスの警察史料には義人同盟との関連を示す証拠がまったくないということである<sup>(10)</sup>。シャパー自体は、季節社の蜂起との関連を義人同盟の中で語っていたようであるが、シャパーのパリ警視庁による逮捕は、季節社との関連の容疑であるが、直接関連したということは証明されておらず、シャパーの言葉には疑問がある。シャパー自身も1850年ヴィースバーデンの裁判所で、実は五月蜂起は傍観していただけであると陳述している [B, 1, S. 999]。シャパーの参加は、同盟内部での勇猛果敢さを示す「法螺」であるのかそうでないのかわからないが、ただ、シャパーと蜂起との関係はすでに当時から有名になっており、本人も気軽に取り消せるものでなかったことは事実である。パリの警察の回顧としてドイツ人とフランス人の共産主義者が蜂起をたくらんだという記録があるというが [B, 1, S. 998]、これだけでは義人同盟が参加したのか、それ以外の結社が参加したのか不明である。武装蜂起をたくらんでいた行動協会のルストもそこには触れられているからだ。パリのアルシーヴ・ナショナルにある季

節社の蜂起で逮捕された人物の中でドイツ人らしきものを探っても、彼らと義人同盟とを結びつけるものもやはりない ([B, 13] 参照)。かりに、義人同盟と関係がないとすれば、シャパーがイギリスへ追放されたことは事実だとしても、あえて、武装闘争派から平和闘争へ闘争方針を変える必要はない。そうであれば、ヴァイトリンクとの決裂の内容自体が不明確になってくることになる。

またヴァイトリンクとシャパーやグリユンとの理論闘争は闘争として、パリの義人同盟員は依然としてヴァイトリンクやグリユンについていたという問題がある。まさにエンゲルスはこうした人々のオルグに 1845 年パリに行くわけであるが、その時パリでは義人同盟員でありながら、追放者同盟員であったり、それ以外の共産主義の組織にいる人々が複雑に入り組んでいる状態であった。エンゲルスはモイラー、エヴァーベックがエンゲルスとともにヴァイトリンク派やグリユン派を改宗させていくわけであるが、エヴァーベックの共産主義協会は仕立て屋が多く、仕立て屋のヴァイトリンクの仲間たちを改宗させることは容易ではなかったはずである。またグリユン派の靴屋などの皮革工職人は、ドイツ人同盟をつくって、義人同盟と違った独自の行動をとっていた人々であり、これまた容易ではなかったであろう。こうした困難の背景には、義人同盟という組織ではなく、職人組織を基礎としてつくられているさまざまな組織があったからである。こうした組織を無視しては、義人同盟の闘争は理解できない。案の定、エンゲルスのオルグ工作は事実上失敗することになる。その結果、共産主義者同盟がパリに移動した時、パリではほとんど仲間を吸収できなかったのである。結果的には、武装闘争を主張する民主協会に主導権をとられ、多くの職人達はそうした武装闘争に参加することになる。

それでは、共産主義者同盟の実態は何であったのか。実際、マルクス、エンゲルスがその議長シャパーに気に入られ、彼から『共産党宣言』の執筆を依頼されるほどに出世することになる共産主義者同盟は実態としては非常に弱いものだったとしか言えないであろう。その理由は、義人同盟自体の中でのシャパー派の弱さである。パリ、スイスでの組織力のなさがそれであろう。また、すでにパリでは援助協会を中心とした労働者の援助組織が発達しつつあり、職

人の組織力が弱まっていたこともあろう。しかし、もう一つは、武装闘争派が、マルクス、エンゲルスの二段階革命論を理解していなかったことであろう。実際、共産主義者同盟がブリュッセルで武装蜂起をしようとしていて、マルクスもそのため、武器を調達したという説がまことしやかに論議されていたように、当時の状態では共産主義者たちの間では、むしろ武装闘争派の方が強かったのである。もちろん、共産主義者同盟はこうした武装闘争を考えてなかったのである。したがって、ある意味では共産主義者同盟は、義人同盟、追放者同盟と断絶しているのかもしれない。二段階革命論を中心とするマルクス型革命論、共産主義論は『共産党宣言』と共産主義者同盟から初めて始まったのかもしれない。しかし、それにもかかわらずマルクスとエンゲルスが義人同盟、追放者同盟にこだわる理由は、彼らがいかに理論闘争を行い、それに統合していったかを証明する必要があったからであろう。しかし、著者としてはこうした見解は支持しがたい。

#### b. マルクス、エンゲルスと初期社会主義運動との関わり

こうした状態が、事実だとすれば、マルクスとエンゲルスの立場をどう解釈したらいいのであろう。マルクスは1843年パリにやってくるが、1845年初めパリを発つまでパリの労働者と親しくなかったことは彼自身回想しているわけで、パリのマルクスの行動を調べてもそのことは証明可能である。マルクスがパリにいた時代は、けっして追放者同盟、義人同盟にとっても、その動きがとまっていた時代ではない。ロンドンのシャパー、スイスのヴァイトリンクを強調することは、当時のパリの位置を誤解させる結果になるが、依然としてパリには多くの結社があり、パリが中心であったことには変わりはない。しかし、当時マルクスは、『フォアヴェルツ』の編集に関連したり、フランスの社会主義者などに会ったものの、秘密結社に関係したことはなかった<sup>(11)</sup>。マルクスは、1845年2月のパリからの追放がなければひょっとすると秘密結社との関係はその後もなかったかもしれない。いや少なくとも遅れていた可能性がある。また、その頃執筆されたマルクスの『経済学・哲学草稿』、『聖家族』、『法哲学批

判序説」「ユダヤ人問題について」を繙いても、そこにマルクスと現実の政治的つながりをみつけだすことは不可能である。

状況を決定的に変えるのが、ブリュッセルへの追放である。マルクスはその年イギリスへエンゲルスとともに旅をするが、ここでシャパーのロンドンの義人同盟とチャーチストと接触するが、おそらくこの時が具体的な運動と関係する最初であると思われる<sup>(12)</sup>。しかし、そうした関わりは、義人同盟へ積極的に関係するという点での関わりではない。むしろ、マルクスとエンゲルスは義人同盟と距離を置いたところで、共産主義通信委員会(1846年)という別の組織をブリュッセルで結成し、共産主義者の国際的組織を作ろうとする。この組織は追放者同盟、義人同盟の各都市の連帯と、諸外国の労働者の連帯を組織の柱とするが、諸外国の社会主義者、共産主義者からは、チャーチストを除いてほとんど期待した答えが得られなかった。とりわけ問題はフランスにあったが、根本にはフランスの共産主義者組織とドイツ人とのつながりがもともとなかったことに原因があった。マルクスが勧誘したプルードンはグリユンと親しい関係にはあったが、プルードンとグリユンの組織的關係は少なくともプルードンの研究から見いだすことはできない。マルクスはプルードンを批判の標的にした『哲学の貧困』(1847年)を執筆するが、そこで批判されたプルードンでさえ理論的な問題は別としてパリのドイツ人共産主義者にほとんど影響を与えなかった。パリの組織は、職人を中心とする堅固な組織の上につくられており、容易に近づきがたい様相をもっていたからである。仕立て職人、靴職人、家具職人を基礎とする組織は、思想的、理論的戦略を越えたところで結びあっており、外部の人にとって近づきがたい存在であったと思われる。だから、1846年に理論的にマルクスに敗北したと言われるヴァイトリンク派も、理論は置くとして組織自体がマルクスに敗北したわけではない。そのことはグリユン派にも言える。パリでエンゲルスのオルグを受けたグリユン派の家具職人は、エンゲルスに洗脳されたということになっているが、実際にエンゲルスの言葉通りであったとすれば、組織は理論闘争によって容易に掌握できるものとなり、秘密結社の背後にある半ば公的な職業組織や社交性の場の意味は消えてしまうことにな

る。しかし、実際職業上の組織の壁は厚い。エンゲルスがパリでオルグ活動をした時に直面したのは、この問題であった。義人同盟の数を概算し、その中の職人の割合を出しているシーダーによると、230人中176人が職人であり、ほとんどが職人から構成されていたといってもよい。職人はよく移動するので、構成メンバーはけっして固定的ではない[B, 8, S. 127]。こうした職人組織を掌握したエンゲルスはその数20名にすぎなかったというが、どうしてそれでパリの組織を掌握したと言えるだろうか。<sup>(13)</sup>

マルクスとエンゲルスは、共産主義通信委員会を組織する一方で、ブリュッセルで民主協会に参入していく。民主協会との関係は現在までもっとも研究が進んでない分野であるが、民主協会は、ブルジョア急進主義者を中心とした組織であり、かつまた民族主義者の組織でもあった。ベルギーにおいては、フランドル独立運動と結びつき、ポーランド人民への独立支援とつながっていた。さらにそれは各国の労働者の団結ともつながっていた。一方で、民主協会は自由貿易によるブルジョア体制の発展につながり、ブルジョア体制の確立をめざすブルジョア急進主義者と、ブルジョア革命そしてプロレタリアート革命の二段階革命を主張する共産主義者とのあいだの微妙な連携をつくりだしていた。マルクスはその副議長となる。民主協会は公的な組織であり、すくなくとも公的な面で見るとマルクスは民主協会の重要人物なのであった。義人同盟は秘密結社であったが、ブリュッセルのドイツ人労働者協会は半ば公的組織で、マルクスとエンゲルスの活動の場は、この二つとなる。民主協会の中にも武装闘争を主張する極左派がいないことはなかったが、<sup>(14)</sup>基本的には議会制内部で権力の獲得闘争がその目的であった。これまでの説では、民主協会へマルクスがはいったことは、組織の拡大をはかるための隠れ蓑として、きわめて消極的に受け取られているのであるが、二段階革命論を主張するマルクスにとっては実はかなり積極的な組織だった可能性がある。パリではこのようにフランス人とドイツ人を結びつける組織は存在しておらず、秘密結社かドイツ人の援助組織だけであった。こうしてマルクスとエンゲルスは民主協会という表での組織に入りながら、『ブリュッセル・ドイツ人新聞』の編集にも入っていく。この新聞は

民主協会と労働者協会といった広い組織をカバーする、パリのかつての『フォアヴェルツ』のような新聞であった。ブリュッセルの公的組織の中で力を持ったマルクスとエンゲルスは、ロンドン義人同盟に戦略的な切り札を持つことになった。

こうしてマルクスとエンゲルスが、パリの組織を掌握して、ロンドンの義人同盟と接触し、その権力をも掌握するという話ができあがる。当時のロンドンのドイツ人はパリに比べて数の点で少なく、依然パリがドイツ人職人の中心であったにもかかわらず、突如として義人同盟本部はロンドンに移ったことになる。やがて義人同盟はマルクスとエンゲルスを迎え、共産主義者同盟という新たな組織へ出発することになったとされている。この組織はフランスの義人同盟を組織し、ロンドン、ブリュッセルを含む組織として出発するということなのだが、パリでそれだけ力をもっていたかどうかは、結局1848年2月革命が起こって、パリに義人同盟本部が移ることになった時に実態が露呈する。それは、パリに移った共産主義者同盟の組織力が非常に小さいことであった。このことは、パリの権力掌握は成功しておらず、ロンドンとパリは結局分離していたということを意味しているのではないだろうか。結局パリにずっと滞在していた職人の多くは、マルクスと行動をともにすることはなかったのである。マルクスとエンゲルスは、いわば秘密結社の運動が終焉を迎えつつある時期に組織に入ってきた人物で、また、それは一面で「科学的歴史観」による近代化であったのであるが、それが意外にも簡単に進んでいった理由は、彼らの理論が優れていたことよりは、そうした秘密組織が分裂崩壊の過程に入っていた理由による。すでにパリでは職業を中心とした秘密結社は、援助組織へ変貌しつつあった。一度崩壊し始めた組織は、革命後多くの亡命者が集まったロンドンでさえ復興することはなかったが、それはロンドンでも労働者組織は教育協会のような援助組織が中心であったからであった。

## 小 括

本稿は、1840年代のフランスさらには諸外国におけるドイツ人の社会主義運

動の組織がどういったものであったかについて分析したわけであるが、こうした組織は各ドイツ人コロニーのさまざまな組織によって規制されていたということであった。公的に黙認された組織、秘密結社、それを引きつける社交の組織は密接に結びつき、たとえば仕立て屋の運動とその共産主義思想といった具合にその体質まで規定していたということであった。また組織は複雑で、一つの組織が中心に立つということもなく、併存状態であったということでもあった。したがって、追放者同盟→義人同盟→共産主義者同盟という発展は、明確に把握できないこと、またその発展において権力がマルクス、エンゲルスに移っていったということも、充分説明できないことが、そこから判明した。当時のドイツ人コロニーを見て言えることは、一般にマルクス、エンゲルスに沿って語られているほど、単純ではなく、かなりこみいった状況にあったと言えよう。まさに、この点においてマルクス、エンゲルスの組織活動は行き詰まってもいたわけでもあった。こうした観点からマルクスとエンゲルスの『共産党宣言』を読み直してみると、まったく別の世界が見えてくるかもしれない。

(注)

- (1) ミュルーズの青年ドイツ派はその例外であるが、ミュルーズの綿工場には多くのドイツ人労働者が働いていた ([B, 14] 参照)。
- (2) マルセユ、ナント、リヨンにおけるドイツ人の状態について子細は不明である ([B, 16] 参照)。
- (3) 以下当時の秘密結社に関する史料は、メルゼブルクのアルヒーフですでに作成してある以下のタイプによる目録も参照した。Quellenauzüge zur Geschichte deutscher Arbeiter-und demokratischer Vereine. Arbeiter-und demokratischer Vereine Frankreich. こうした史料は膨大であり、個々の整理番号を書くことは省いた。
- (4) マルクス、ルーゲの住居はこの地域から少し離れたサン・ジェルマンにあった (拙著『パリの中のマルクス』御茶の水書房6章参照)。
- (5) マルクス、ルーゲの『独仏年誌』はこの地域から離れたところにあったが、『フォアヴェルツ』はまさにこの中心に位置していた (拙著『パリの中のマルクス』御茶の水書房4章参照)。
- (6) 公的には追放者同盟のことは知られていても、義人同盟のことは知られていなかった。たとえば、パリのアルシーヴ・ナショナルの史料には追放者同盟について

しか書かれていない ([B, 13] 参照)。

- (7) 追放者同盟→義人同盟→共産主義者同盟という単純な図式を受け継いだのが、メーリンクである。メーリンクは、『ドイツ社会民主主義の歴史』の5章職人的共産主義と14章共産主義者同盟という章で、追放者同盟から共産主義者同盟にいたる流れを明確に記述している [B, 7]。そうした流れはその後ソ連共産党にまで引き継がれ、共産主義者同盟の資料集 [B, 1] の編集にも、またつい最近のフントの研究 [B, 5] にも引き継がれている。メルゼブルクには、その他の秘密結社の史料も多く存在しているが、そのことには何等言及していない。きわめて不可解である。わが国でも事情はほぼ同じである。石塚は、大筋ではこの流れを認めながらも、義人同盟内部の闘争におけるヴァイトリンク派の意味をそれなりに認めようとする点で、鋭い指摘をしている ([B, 11] の4章)。シーダーは、パリ、スイス、ロンドンの結社の動きを地理的、水平的にとらえ、一つの結社が全体を統一していくという従来のパターンを破っている。同時多発的な発展をとらえたという点では、当時の結社の状態をもっともよく説明しているといえよう。ただ、1842年までで終わっている点が問題ではあるが [B, 8]。
- (8) 1848年革命直後マルクスがブリュッセルで武器を購入し、革命の準備をしたということがそれである。
- (9) 季節社に関する史料は、アルシーヴ・ナショナルに収められて、CC723からCC761までの箱には膨大な史料がある。特にシャパーに関する史料はCC739、靴職人アウステンに関する史料はCC726にある。この史料のどれを見ても、季節社との関係をつかむことはできない。また、ドイツ人と思われる人物をそれぞれ調べてみても、その人物と季節社との関係、また義人同盟との関係を見つけることもできない。
- (10) 季節社との関係では、旧東ドイツの義人同盟研究の権威フントですら、直接の関係を否定している [B, 5, S. 103]。しかし、それにもかかわらず基本的には武装闘争派として大きな影響力を持っているとして関係を認めている [B, 5, S. 104]。グランジョンは、エンゲルスに関して一般に広まったシャパーと季節社の蜂起との関係について、これは謬説であると断定している [B, 3, p. 181]。そして丹念に史料を調べ、「義人同盟は季節社の一部門とは考えられ得ないし、義人同盟は組織としても、メンバーとしても、1839年5月12日、13日の武装蜂起には参加しなかったと思われる」 [B, 3, p. 183] と述べている。シーダーは最初にドイツ人関係の史料をパリのアルシーヴ・ナショナルで調査したのであるが、季節社と義人同盟との関係をすでに1960年代に否定しているのである [B, 8, S. 54 f.]。
- (11) 「私は最初のパリ滞在中に、同盟のそのほかの幹部連や、フランスの労働者秘密結社のたいていの指導者たちとも日頃個人的な交際をしていたが、しかしこれらの団体のいずれにも加入しなかった」 [B, 6, S. 438]。『政治家としてのマルクス』を書いたシーダーはマルクスと具体的な政治との関わりは、ブリュッセル以後として、



こうしたつきあいは表面的なものであったと述べているが [B, 8, SS. 35-36], この見解には賛成である。

- (12) 良知力は、マルクスがパリのワイン店での共産主義者の集会に参加したというプロイセンの報告記録があると述べているが、残念ながら出典の典拠がない [B, 17, p. 127]。筆者はその記録を見ていないので即断はさけるが、マルクス自身も接触をもったことは認めている。しかし、このことで義人同盟と恒常的接触をもったということは無理であろう。パリの警察史料ではマルクスの名が出てくるのは、1845年からである ([B, 13] 参照)。
- (13) 良知力は、「やがてエンゲルスはパリの主導権を握るのである」 [B, 17, p. 168] と述べている。しかしその良知も大部分を掌握したわけではないとは言っている [B, 17, p. 167]。
- (14) ベルギーのリスコン・トゥーで起きた武装集団の事件は、民主協会の左派スピルトホルンが起こしたものであったが、これとマルクスは一切関係ない (拙著『パリの中のマルクス』御茶の水書房8章参照)。

## 引用文献

### A. アルヒーフ史料

- (1) Zentrales Staatsarchiv, Merseburg.  
 (2) Archives Nationales, Paris.

### B. 文献資料

- (1) *Der Bund der Kommunisten, Dokumente und Materialien*, Bd. I 1836-1849, Berlin, 1983.  
 (2) Engels, F., Zur Geschichte des "Bundes der Kommunisten", Einführung zur dritten Ausgabe von Marx' Schrift, *Enthüllungen über den Kommunisten-Prozess zu Köln*, MEW., Bd.8.  
 (3) Grandjonc, J., *Communisme/Kommunismus/Communism, 1785-1842*, Schriften aus dem Karl-Marx-Haus, Nr. 39/1, Trier, 1989.  
 (4) Grandjonc, J., La Presse de l' Emigration allemande en France (1795-1848) et en Europe (1830-1848), *Archiv für Sozialgeschichte*, Bd. 10, 1970.  
 (5) Hundt, M., *Geschichte des Bundes der Kommunisten 1836-1852*, Frankfurt a. M., 1993.  
 (6) Marx, K., *Herr Vogt*, MEW. Bd.14.  
 (7) Mehring, F., *Geschichte der Deutschen Sozialdemokratie, Franz Mehring Gesammelte Schriften*, Bd. 1, Berlin, 1976.  
 (8) Schieder, W., *Anfänge der deutschen Arbeiterbewegung*, Stuttgart, 1963.  
 (9) Schieder, W., *Karl Marx als Politiker*, München, 1991.

- (10) Schräpler, E., *Handwerkerbünde und Arbeitervereine 1830-1853*, Berlin, 1972.
- (11) 石塚正英『三月前期の急進主義』長崎出版, 1983年。
- (12) 拙稿「1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態について(1) 東フランスについて」『東京造形大学雑誌』6A, 1990年。
- (13) 拙稿「1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態について(2) 特にパリに関して(上)(下)」『商経論叢』27巻3号, 4号, 1992年。
- (14) 拙稿「1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態について(3) 西南フランスについて(上) フランス経由でスイスを追放されたドイツ人のルート」『商経論叢』28巻3号, 1993年。
- (15) 拙稿「1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態について(3) 西南フランスについて(中) ルアーヴル経由でアメリカへ渡ったドイツ人」『商経論叢』28巻4号, 1993年。
- (16) 拙稿「1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態について(3) 西南フランスについて(下) 1848年革命とドイツ人」『商経論叢』29巻3号, 1994年。
- (17) 良知力『マルクスと批判者群像』平凡社, 1971年。

※本稿は、田中正司教授の退任記念号であるが、教授には一橋大学社会科学古典資料センター以来のお付き合いで、二度あることは三度、何と退任記念の論文集に参加するのもこれで三度目である。これは筆者にとって望外の喜びであるが、先生の長命を願い、できれば四度目もご一緒したいものである。また本稿は「1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態」の最終稿であるが、一連の論稿は拙著『フランスにおけるドイツ人』(御茶の水書房)にすべて収録される予定である。なお本書は、本学の経済貿易研究所から出版助成を受けている。